

中級日本語学習者と日本語ネイティブ学生の共同クラス

－ 新たな学習ダイナミクスの可能性と課題 －

Collaborative Classes Between Intermediate Japanese Learners and Native Japanese Students: Exploring New Learning Dynamics and Challenges

櫻井陽子 (ニューヨーク市立大学 バルーク校)

要旨

近年、外国語クラスの形態はますます多様化している。米国東海岸にある筆者の勤務校の日本語クラスでは 2022 年より中級学習者 (IL～IM) 対象の日本語クラスに、日本で教育を受けた日本語ネイティブスピーカー (以下 NS) を試験的に複数名受け入れている。これを日本語教育の新たな可能性を模索する好機と捉え、コース設計と実践を行っている。授業は登録者の大半であるノンネイティブ中級学習者 (以下 NNS) に向けたものを実施し、NS の学生に対しては NNS との対話手段となる〈やさしい日本語〉(庵ほか) の習得と使用を課題とした。学期末に NNS を対象に行ったアンケート結果からは、NS の存在がもたらす多角的な学びの機会を NNS が高く評価していることが窺える。この取り組みが比較的特殊な事例であることを踏まえつつ、本実践報告が NS と NNS の共同クラスの可能性に何らかの示唆を与えるものになればと考えている。

キーワード: 共同クラス、 区別化 (differentiation)、 ネイティブスピーカー、 〈やさしい日本語〉

1. はじめに

本稿は、米国東海岸にある公立大学の日本語 3 年生のクラスで、Intermediate Low レベルの学生 20 名 (ノンネイティブスピーカー=NNS) と、日本語ネイティブスピーカー (NS) の学生 5 名で行った共同クラスについての実践報告である。中級学習者とネイティブの共同の形態はあまり類を見ないものであり、2024 年現在ではまだ特殊なものと捉えられるかもしれない。事実、この実践は当校の学部の方針によるもので、担当した筆者自身も開始前は不安を抱いていたことは否めない。しかしながら結果は、数件の課題も残されたものの、教師・NS・NNS の三者ともに得るものが多く、言語クラスの多様性のあり方や新たなダイナミクスを考える上で大変有意義なものとなった。本稿ではこの実践のうち、NNS の学びと反応に焦点を当てて記述する。NS の学びについては 2024 年 5 月に開催された Princeton Japanese Pedagogy Forum で発表しており、そちらの予稿集も併せてご参照いただければと思う。尚、NS・NNS のように二項対立的に捉えることには議論の余地があると承知しているが、本稿では便宜上、二つのグループを NS・NNS とラベリングして扱う。また、適切性が議論されている下記の用語を引用の必要性等から本稿の中でやむを得ず使用する場合があります。

2. 実践の背景

初めに日本語クラスに NS を受け入れた背景について述べる。筆者の勤務校の言語クラスの最も高いレベルは「上級 (Advanced) 4000 レベル」である。受講者の背景は様々で、時には超級及びネイティブレベルの学生を含む場合もある。当校の地域にはスペイン語、中国語等の継承語話者が多数おり、大学での学習の継続を希望するケースが多い。さらに今回のリサーチ対象者のように、自分の第一言語で教育を受けた期間が短く、自国外での生活経験の方が長い学生など、バックグラウンドが多様であり、継承語と第一言語との線引きが難しいところである。大学として多様な学習者への教育の機会の提供が求められていることもあり、最高レベルである 4000 レベルのコースについては、原則的に相談の上で言語熟達度がクラスのレベルを超えている学生も受講が可能である。

このような背景から、他の言語ではもともと超級レベルの学生を上級クラスに受け入れるケースがあった。日本語では2022年秋学期に超級/NSからの初の受講希望があり、新たなダイナミクスを模索することを目標に、試験的に受け入れることとなった。

下記に、本稿で報告する 2023 年秋学期に受講した NS のバックグラウンドを記す。5 名中 4 名が、一定期間日本の教育機関に在籍し、日本語を第一言語であると自認している。残り 1 名は日本在住経験が短く、日本語を第一言語と自認していないが、会話レベルは推定超級以上である。本稿では便宜上 5 名全員を NS と呼ぶことにする。自認性は女性 3 名、男性 2 名で、全員 20 代前半である。日本語を副専攻とし、複数回日本語クラスを受講している学生が合計 2 名と、初めて日本語クラスを受講した学生が 3 名いた。全員が、大学卒業後日本で生活する可能性も視野に入れている。

表 1. 2023 年秋学期に受講した NS の背景

日本語レベル	4 名：日本在住・日本の教育機関への在籍期間が長く、日本語を第一言語であると自認。 1 名：日本在住経験が短いことから、日本語を第一言語であると自認していない。会話レベルは推定超級以上。
自認性と年代	3 名：女性・20 代前半 2 名：男性・20 代前半
日本語 4000 レベル履修歴	1 名：3 学期目(日本語副専攻) 1 名：2 学期目(日本語副専攻) 3 名：1 学期目

さて、このコースは日本語学習 5 学期目のコースである。タイトルは「上級 (Advanced)」という語を含んでいるが、主たる対象となる学生は日本語初級教科書の学

習を終えたばかりで、殆どが ACTFL の IL レベルである。このため、NS との究極の区別化(differentiation) が求められた。区別化を考える際、NS が単に TA に準ずる役割を果たすことでは不十分であり、洞察に富んだ学びを得るための課題設定が必要となった。

そもそも日本語教育の訓練を受けていない NS が、教育機関における中級クラスのアシスタントのような役割を果たすことは専門的見地から見て難しい。IL レベルの学習者にとってネイティブレベルの日本語は極度に難解であり、このため日本語で会話を続ける手段として、学習者に寄り添ったレベルのいわゆる〈やさしい日本語〉を使うことが求められる。そして〈やさしい日本語〉について学ぶことは、単に言語を簡易化するスキルを習得して日本語クラスという限られた場面で貢献することにとどまらず、移民が増加し、多文化共生を目指す日本社会に積極的に貢献する人材を育成することにも繋がると考えた。

現在、日本では少子高齢化による深刻な労働力不足の対策が緊急の課題となっている。毛受 (2019) は、「日本が『人口減少による衰退を免れるためには、一定程度の移民を受け入れる以外に方策はない』」と述べている。しかし、スイスの作家マックス・フリッシュが言った「我々は労働力を呼んだが、来たのは人間だった」という言葉が表している通り、移民は労働力のためだけに来る都合のよい存在ではなく、当然人間としての生活を営んでいる。受け入れる側も移住する側も共に生きる方法を学び、実践していかなければならない。

そこで移住者と共生するための言語について検討する必要が発生するが、庵 (2019) は、移民の急増する「地域社会の共通言語は、一定の調整が加えられた〈やさしい日本語〉しかあり得ない」と断言する。そして「〈やさしい日本語〉を共通言語として確立できるかどうかは日本語母語話者の意識次第」であり、「マジョリティに働きかけていくことが不可欠」だと論じている。

もともと鍵括弧付きの「やさしい日本語」は、1995 年の阪神淡路大震災で外国人の被災が甚大であったことから、非常時の外国人の減災を目的に考案された(佐藤 2004)。その後、庵 (2016) らが平時の外国人の言語保障として三角括弧付きの〈やさしい日本語〉に発展させ、近年では日本が多文化共生社会へ向かう中、母語話者を含む万人にとって重要な意味を持つものに変化を遂げてきた。さらにオストハイダ (2019) は、母語話者、非母語話者、障害者、健常者などのカテゴリーに一切触れない「全ての人」にとっての「やさしいことば」がドイツの法律に盛り込まれていることに言及し、特定の対象を設けている〈やさしい日本語〉について更なる議論を促している。これらを念頭に置き、本校の日本語クラスを受講する NS が、〈やさしい日本語〉を批判的にとらえながら使用すると共に、多文化共生社会について考えることを目標にした。

3. 実践の概要

3-1. クラスの概要

NS を受け入れた 4 つの学期のうち、本稿では 2023 年秋学期の実践を報告する。当校の日本語 4000 レベルのクラスは学期によって内容が異なる。2023 年秋学期のクラスの概要は下記の通りである。教科書はスリーエーネットワークの「タスクベースで学ぶ日本語 中級 1」を使用した。Task-Based Language Teaching に依拠したこの教科書には、各課のテーマに関する自分自身の経験や意見を伝え合うという明確なゴールがあり、教室ではそのゴールの達成を目指すための会話の機会が豊富にあった。

表 2. 2023 年秋学期のクラス概要

時間・単位	75 分 x 週 2 回 x 14 週 = 合計 35 時間 / 学期 (3 単位)
タイトル	JPN 4005 Advanced Japanese Oral and Written Communication
教科書	「タスクベースで学ぶ日本語 中級 1」スリーエーネットワーク クラスで扱ったのは下記の 4 課 1. 第 1 課「習い事は役に立つ？」 2. 第 4 課「旅の計画を立ててみよう」 3. 第 5 課「違いについて考えてみよう」 4. 第 6 課「音楽にはどんな力がある？」

3-2. NS の課題と役割

ここでは NS に与えられた課題と役割を記す。下記はクラス内の課題と役割である。

表 3. NS のクラス内での主な役割

内容	頻度
・会話活動の際、 <u>やさしい日本語</u> を使って会話を続ける。	毎授業
・漢字や読解のグループワークの際、NNS をアシストする。	毎授業
・クラス全体に向けて単語の説明をしたり、例文を提示したりする。 例：「せつない」「ヤンデレ」等	必要に応じて
・ <u>やさしい日本語</u> を使って発表。（NNS が日本語のわかりやすさを評価し、成績に反映） 例：文化、社会問題、あまり知られていない日本の名所等	学期中に 1 回

NS のクラス内での主な役割は会話活動の際、〈やさしい日本語〉を使って会話を続けることや、その他のグループワークの際に NNS をアシストすることである。毎授業 2, 3 回のペアやグループワークがあり、1 回の授業で必ず 1 度は NNS が NS と話せるようにした。また、教師が NS に単語の説明や、例文の提示を補助的にお願いすることもあった。例えば、「せつない」のように多角的な例を出すと効果的な場合や、「ヤンデレ」などのいわゆる若者言葉を扱う場合である。

ほかに学期中に 1 回以上、個人またはグループで、やさしい日本語をつかって日本文化などについて発表してもらい、その際、NNS が日本語のわかりやすさを評価して NS の成績に反映させた。次にクラス外の課題について述べる。

表 4. NS のクラス外の課題

内容	頻度
・〈やさしい日本語〉や多文化共生社会に関連する文献を読んで、内容の要約と意見を提出。 例：『入門・やさしい日本語 外国人と日本語で話そう』 吉開章(2019)	週 1 回程度
・初級教科書を読んでクラスメイトのレベルの理解に努め、教科書の批評を行う。	学期中に数回
・NNS のファイナルプロジェクトの第一稿のピアレビュー。	学期中に 1 回
・[Extra Credit] 要望に応じて NNS と 30 分以上日本語で会話をし、レポートを提出。	学生により異なる

クラス外の課題は、〈やさしい日本語〉や多文化共生社会に関連する文献を読んで、内容の要約と意見を提出すること、初級教科書を読んでクラスメイトのレベルの理解に努め、教科書の批評を行う、などがある。ほかに NNS のファイナルプロジェクトの第一稿のピアレビューを行うこと、更にエクストラクレジットとして、NNS の要望に応じて日本語会話の相手をし、レポートを提出するなどがあった。

注意したこととして、学期初日のオリエンテーションの中で全体に向けて、クラスに NS が参加していることを伝えた。そして日本における〈やさしい日本語〉の取り組みを紹介し、NS が努力して〈やさしい日本語〉を使い、クラスに貢献することを学生全員に周知した。これにより、NNS が抱く可能性のある不公平感を軽減しようと試みた。

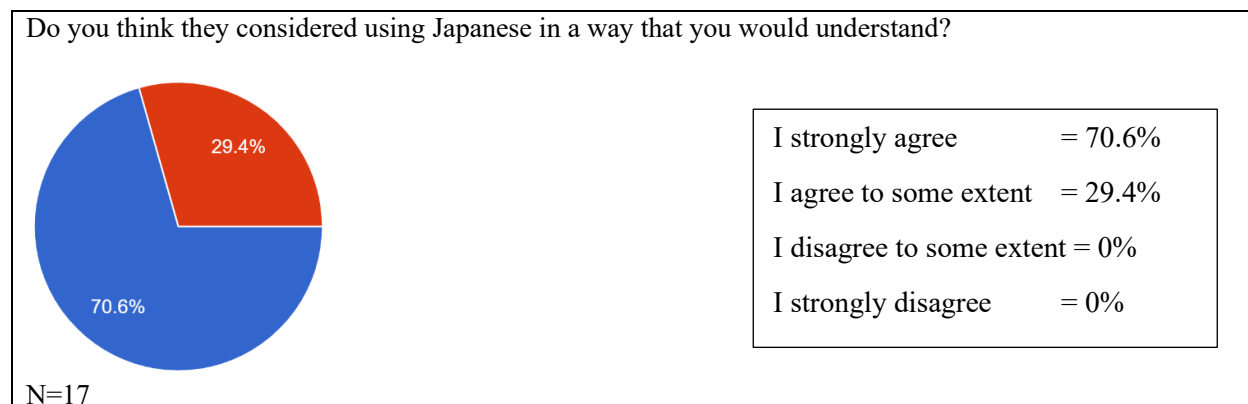
4. NNS の認識と学び

4-1. NS の使用する〈やさしい日本語〉に対する NNS の評価

ここからは、この共同クラスに関して NNS が得た認識と学びについて、学期末に実施したアンケートの結果から考察する。アンケートは匿名で、NNS 全 20 人中 18 人から

回答を得た。質問項目計22問のうち、重要なものを抜粋してまとめる。はじめに、「NSの日本語に十分な配慮を感じたか」という質問に対する回答結果を紹介する。

グラフ 1. NNS 対象のアンケートの質問と回答 (1)



設定ミスにより回答者が1人欠けて17人となったが、全員が「強く同意」、あるいは「ある程度同意する」と答えた。

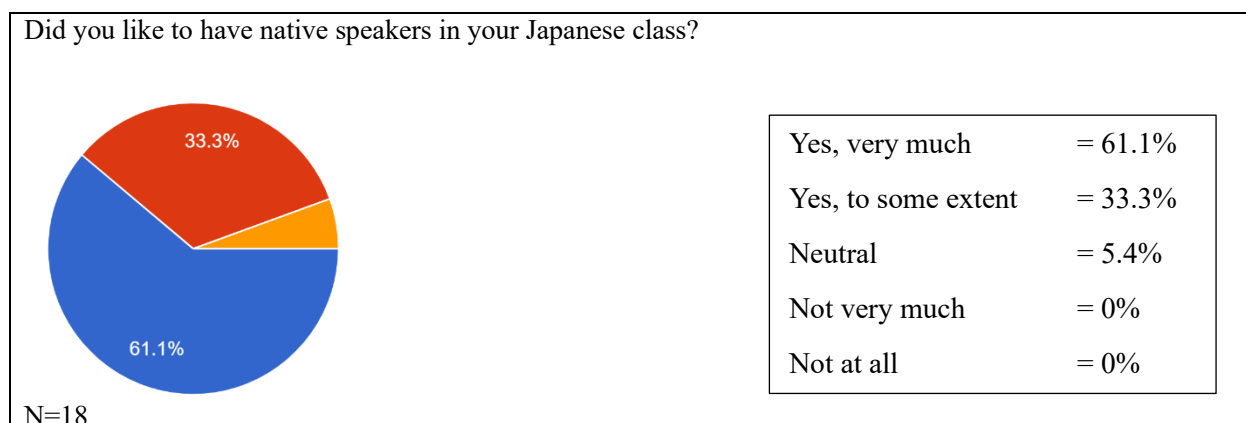
正直なところ、教師の目から見てNSの使用する日本語の単語の難易度や話すスピードが、中級話者にとってやや難しいように感じられることがしばしばあった。しかし、学習者がNSの配慮を感じ取っていたという点は極めて重要である。NNSの評価を見る限り、「〈やさしい日本語〉を実践するよう努める」というNSのゴールは達成されていたと言えそうである。

4-2. 共同クラスの利点と課題に関するNNSの認識

次に、クラスにNSがいたことの利点と課題についてのNNSの意見を考察する。アンケート実施前、筆者自身は公平性の観点や、会話活動のハードルがあがってしまうことについて否定的な意見が出ることへの懸念があった。また、学習者の中には自身の日本語に対する評価があまり高くない者もあり、クラスでNSとの会話の際に極度に緊張している場面も時折観察されていたことは気がかりであった。

そこで、まず「クラスにNSがいて良かったか」という質問をしたところ、下記のような回答が得られた。

グラフ 2. NNS 対象のアンケートの質問と回答 (2)



「とても良かった」が最も多く 60%を超え、次の「ある程度良かった」と答えた学生と合わせて 94%以上に達した。1 名のみが Neutral と答え、否定的な回答は全く見られなかった。

理由についての記述をカテゴリー化して下記に記す。

(1) 文化的事象の多様な視点に触れることができた。

- They show us many different cultural aspects from their experience.
- They are helpful in terms of providing a different perspective.

(2) モチベーションへの良い影響があった。

After spending time together after class, I felt my motivation come back a bit. It was less pressure and fun.

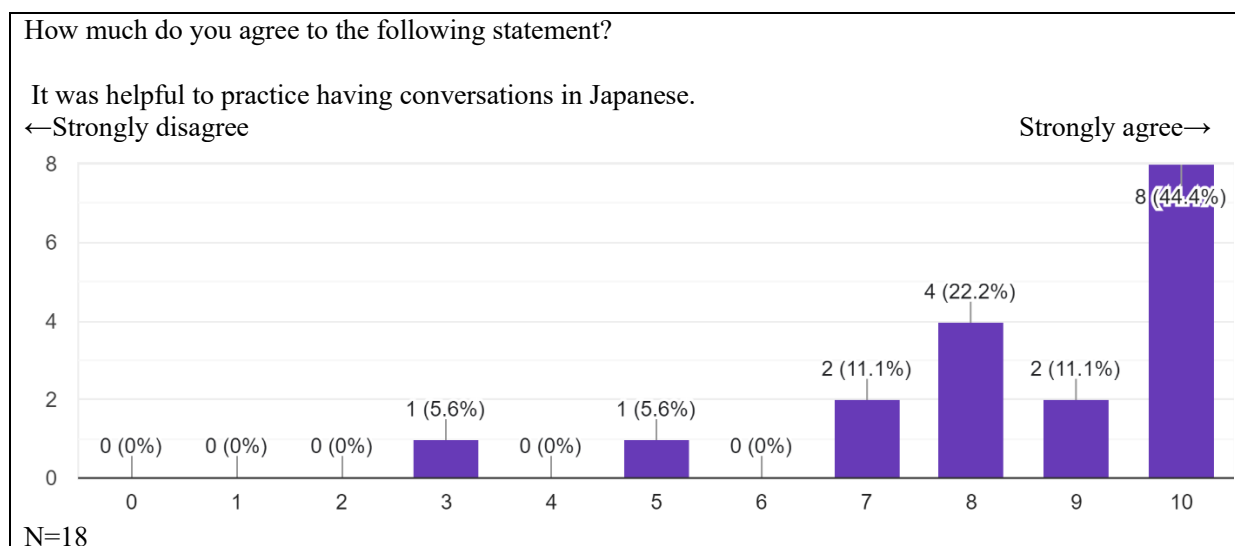
(3) さらに学習の必要性を実感した。

[プロジェクトのピアレビューを NS がしたことについて]
[It showed me] how much more I had to learn. It was a good gauge for what I should strive for in the future or next steps when I am not able to get a proper Japanese education.

アンケート結果から、NNS は NS の存在を歓迎しており、豊富な学びの機会を得たと認識していることがわかった。

次に、ステートメントを提示してそれぞれにどの程度同意するか尋ねた。まず、NS の存在は「日本語での会話練習に役立った」というステートメントに対する回答は以下の通りである。

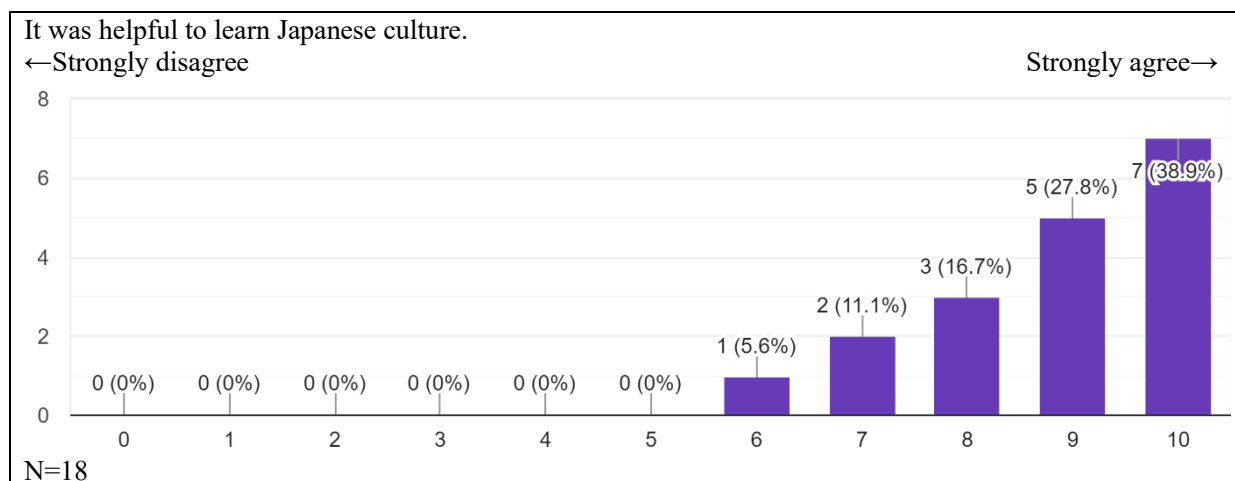
グラフ 3. NNS 対象のアンケートの質問と回答 (3)



この質問への回答は 10 ポイントの「強く同意する」が 44.4%と最も多かった。しかし「どちらとも言えない」と「あまり役立たなかった」と考えた学生も併せて 2 名いた。

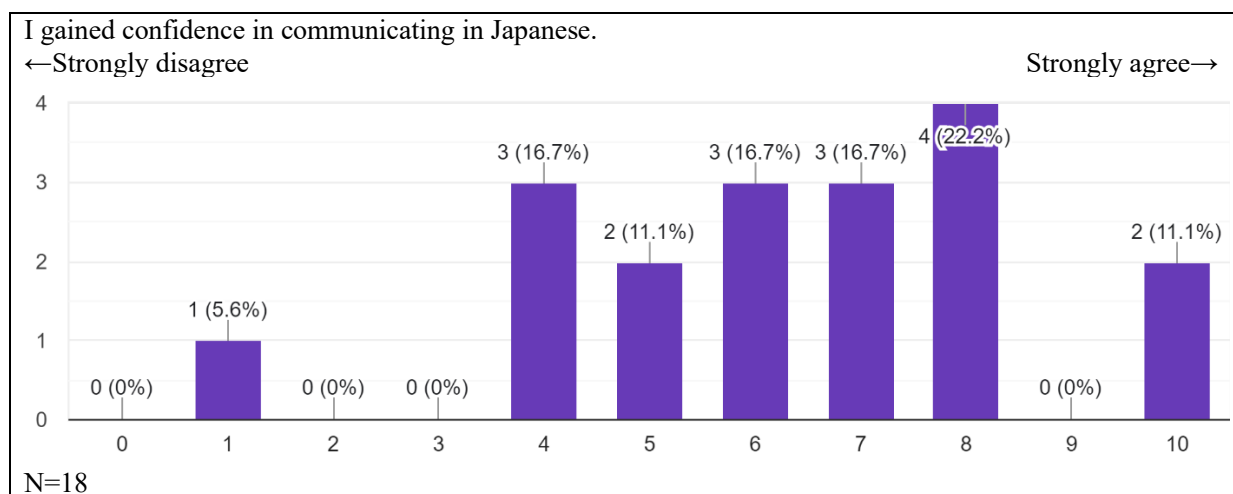
続いて下記は、「日本文化の学びに役立ったか」というステートメントに対する回答である。こちらは回答の平均値と中央値が 9 ポイントと最も高かった回答で、全ての学生が 6 ポイント以上を選んだ。

グラフ 4. NNS 対象のアンケートの質問と回答 (4)



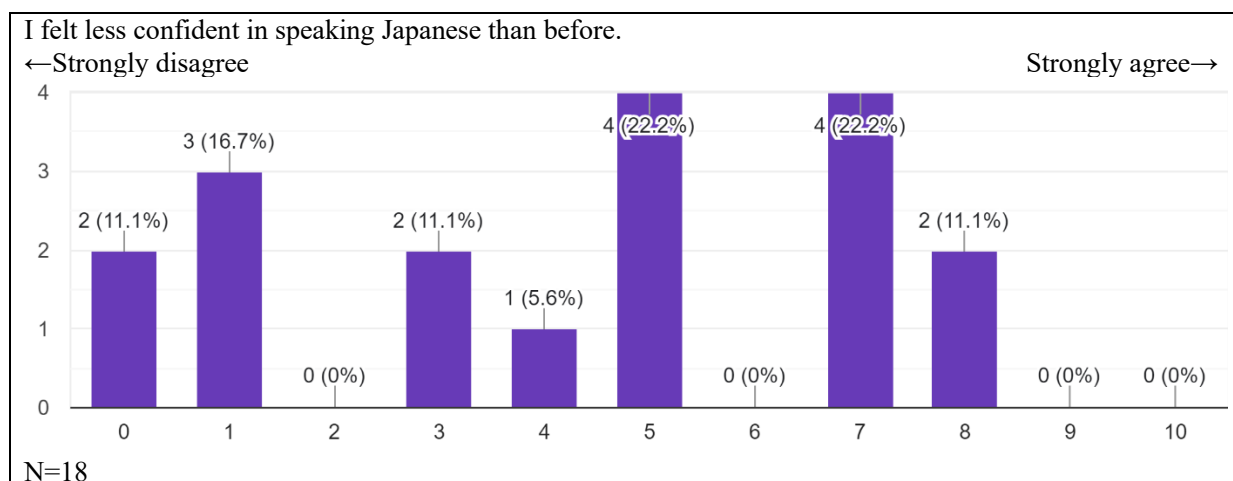
次の「日本語でのコミュニケーションに自信がついたか」という質問では、回答が完全に分散した。8 ポイントをつけた学生が 4 人、そして 7, 6, 4 ポイントをつけた学生がそれぞれ 3 人ずつであった。1 を選択した学生も 1 人いた。

グラフ 5. NNS 対象のアンケートの質問と回答 (5)



続く質問は上記と表裏一体であるが、「日本語でのコミュニケーションに対する自信の度合いが下がったか」と尋ねた。回答は「同意する」寄りの 7 ポイントと 8 ポイントが合わせて 6 人で全体の 3 分の 1 に上った。一方で「同意しない」寄りの 0 ポイントと 1 ポイントも少ないわけではなく、合わせて 5 人であった。中央の「5」をつけた学生数は 4 人であった。

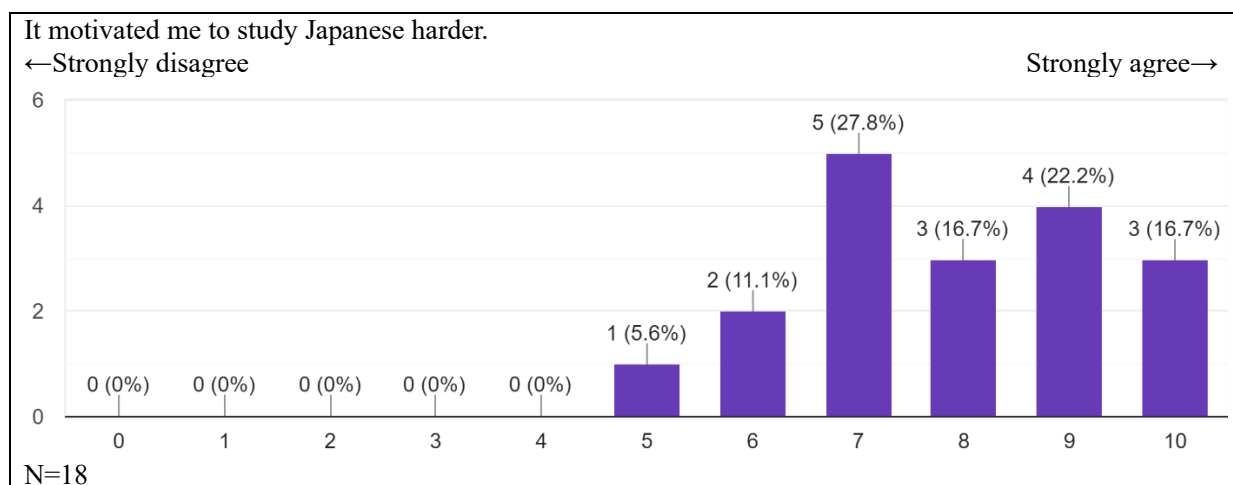
グラフ 6. NNS 対象のアンケートの質問と回答 (6)



NS との会話体験が成功的であったか否かによって学習者の自信への影響が異なることは、英語学習者を対象にした松崎 (2022) の論文でも言われている。NNS がどのような体験をしたか、今後詳細に見ていく必要があるだろう。

ここまでの「自信」についての回答は分散したが、次の「学習意欲の向上に繋がったか」という質問については 7 ポイント以上を選択した学生が全体の 85% 近くを占め、「同意する」寄りに固まった。

グラフ 7. NNS 対象のアンケートの質問と回答 (7)



先述した通り、NS と頻繁に会話をする機会を得たことによる学習者の自信へのネガティブな影響は否定できないものの、現実を見ていっそう努力しようと思ったケースも多かったと言えるのではないだろうか。

以上の回答の中で学生本人にとって特に重要な項目に関して詳しくコメントしてもらった欄を設けたところ、「自信」や「モチベーション」に関する記載が目立った。これ以降のコメントはすべて原文ママである。コメントではほとんどの学生が、肯定的、否定的の両面を含めつつ、最終的にはおおむね肯定的な考えを示した。下記に学生のコメントの例を挙げる。

[having native Japanese speakers] can help improve your speaking, if fully utilized. Hearing more fluent native speakers converse, it was hard to not feel a little discouraged.
I do not blame them for such as it was merely a way to further show how far behind I was in comparison to being conversational.
They are great for the class!

上記の学生は、「ネイティブがいることで会話力の向上につながったが、自信を失わずにいるのは難しかった。でも、それはネイティブのせいではない。自分が流暢になるまでにはまだまだ遠い道のりであることを実感した。」と述べた。そして最後に「クラスにネイティブがいたことは素晴らしかった！」と結んでいる。下記の2件もプラスとマイナスの両面を経験したことと言及した記述である。

Speaking to a native speaker is intimidating to any language, but it can also be rewarding.

It may cause to lose confidence and gain confidence with each interaction.

また、文化的な学びに関するコメントも多く見られた。ある学生は「文化的事象について、教師だけでなく他の人の意見が聞けて、授業がより充実した」と述べている。

Having other people to give their thoughts on cultural phenomena, etc. **it felt like it added a lot to the class to have more opinions available** to hear/have the professor bounce ideas off of.

文化的学びに触れたコメントがほかにも多く見られた理由として、文化を扱う際にできるだけ NS の学生にも発言してもらうようにしていたことが考えられる。例えば、文化の違いを扱ったユニットでは、ユーチューバーである日本語学習者が自身のチャンネルの中で日本の店でのサービスに感動したという話を紹介している動画をクラスで視聴した。この動画についてグループで一通り話し合った後 NS の学生らにコメントを求めたところ、「過剰なサービスは客として疲れることもある」や、「客の立場が極端に上であり、カスタマーハラスメントの問題に繋がる」など、異なる視点からの意見が出された。このように多角的な意見に触れたことは学習者にとって意義深かったようである。

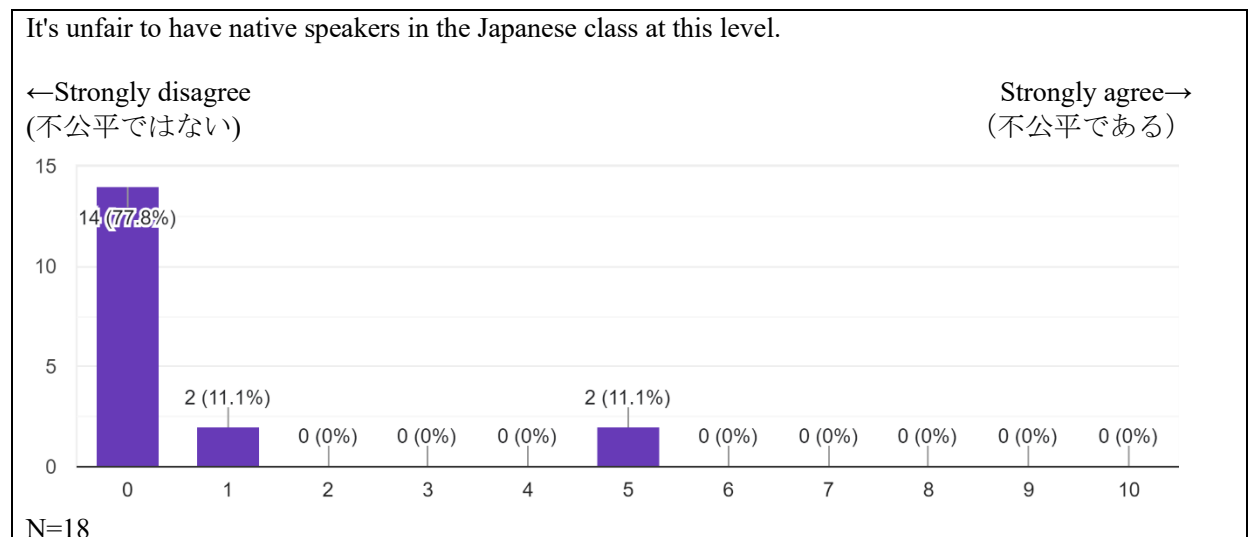
その他に、「NS 同士の会話を見て、自然でカジュアルな話し方を学んだ」とつぶった学生もいた。

it was very helpful **especially understanding how friends converse with one another naturally/informally.**

このコメントについて、筆者の観察から見られた例を一つ挙げる。この日本語クラスは午後 4 時に始まるものであったが、NS 同士はクラスに着くと「おはよう。」と挨拶し合っていた。それを見て、学習者が興味津々に「どうしてこの時間なのに『おはよう』と言うのか」と本人たちに尋ねる様子が見られた。教科書の内容と異なることを目にしたことが新鮮だったようである。

この項の最後に、「ネイティブがこのクラスをとることは不公平だと感じたか」と質問した。これは担当として最大の懸念事項であった。結果は、ほとんどが「不公平だと感じなかった」と回答し、2 名が中間の「5」を選択した。

グラフ 8. NNS 対象のアンケートの質問と回答 (8)



下記は、中間の「5」をつけた学生のコメントである。

I believe to a certain extent that it may be unfair that a native can have an easier time regarding the material and the language itself. They might not need to practice or study hours and hours like non-native speakers. But I also can understand that they are doing their own workload that may be more oriented to them and although they are, they have more of an advantage to the rest.

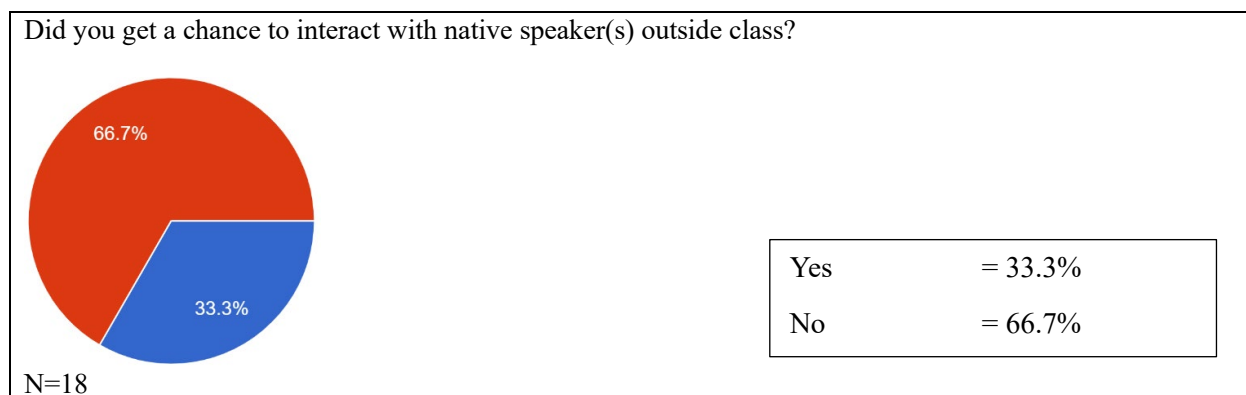
コメント後半の「ネイティブ用の課題もあることは承知しているが、それ以外のことは彼らには簡単すぎる。」という意見は非常に的を射ており、今後の課題として考えていきたい。詳細は後述する。

上記の学生のほかに、このステートメントに対して「0」つまり不公平ではないと答えた学生のコメントに「The grades of other students are not my concern.」というものがあつた。これはおそらく「NS がいわゆる easy A が取れたとしても、それは自分の関心事ではない」という意味であると思われる。個人主義が反映されたコメントではないかと考え、興味深く受け止めた。

4-3. クラス外でのインターアクション

次にクラス外の NNS と NS とのインターアクションの頻度と満足度に関する回答を考察する。アンケートの中で「クラス外でネイティブとやり取りをしたか」という質問をしたが、これを聞いた理由は、彼らの関係が言語学習の相手という枠組みを超えるかどうかを知りたいと考えたからである。学習者が日本人学生と直接接触し、関係を築けることは、対面のクラスならではの特徴である。結果を見ると、3分の1の NNS がクラス外で NS と交流したと答えた。これは比較的高い数字だと考えられる。

グラフ 9. NNS 対象のアンケートの質問と回答 (9)



詳細の記述を紹介する。3 人の学生は食事などを一緒にとりに出かけたと答え、この経験に満足した旨のコメントを添えている。

We went to grab ice cream after class. We spoke mostly in Japanese. **It was fun. I am glad I went.**

We went out to eat together. [中略] **It was very fun and I would love to do it again.**

下記の学生は、「日本人の『友達』が作れてよかった」と述べている。

I hung out with them and occasionally grabbed food with them. We mainly used English but I tried to incorporate some Japanese words into our conversation. I liked it a lot, **it was fun making japanese friends and hanging out with them!**

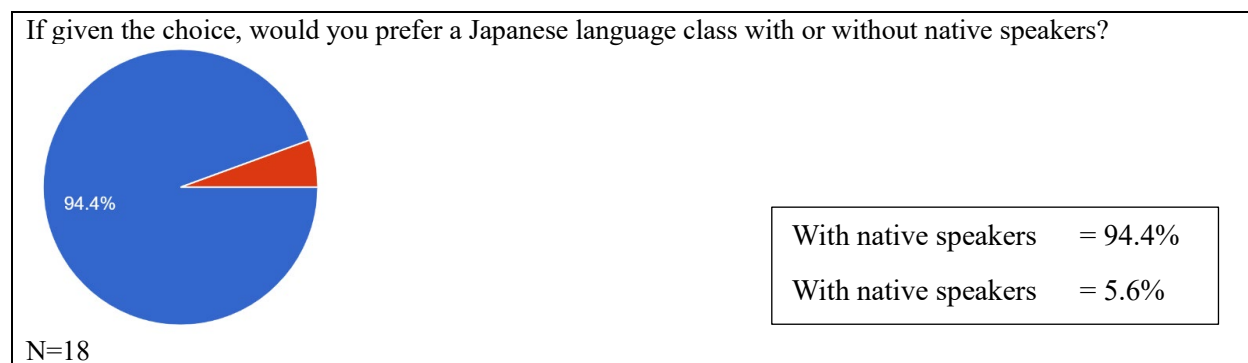
ほかに、「クラスであまり話すチャンスがなかった学生と、クラス外でもっと知り合うことができ、お互いの共通点がわかったことは楽しかった」とつぶった学生もいた。このようなコメントには、彼らの関係が「会話練習の相手」として人的リソース的にとらえる範疇を超えた場合があったことが示されているのではないだろうか。

Our communication was only in Japanese.

It was pleasant to get to know better [Y-kun (学生の名前)] as I didn't get to interact much in class --- turns out he is very kind and we have some things in common which is fun.

アンケートの最後に「今後もし選べるなら、ネイティブがいるクラスといないクラス、どちらを選ぶか」という質問をした。予想では回答が半々ぐらいに分かれるかと考えていたが、1 名を除いて全員が「ネイティブがいるクラスのほうがいい」と答えたことは、少々意外であった。

グラフ 10. NNS 対象のアンケートの質問と回答 (10)



尚、「ネイティブがいないクラスのほうがいい」と答えた 1 名は理由を記載していた。

I feel bad. I was sometimes too nervous to speak to them.

上記の通り、理由は「自分が緊張しすぎて、申し訳なかった」という自身の課題に触れたものであった。この学生は最初の「クラスにネイティブがいてよかったか」という質問には「ある程度そう思う」と答えていて、受講クラスのネイティブの存在には否定的ではなかった。

5. まとめと今後の展望

今回の共同クラスにおいて、NNSはNSとの豊富な会話の機会を享受し、文化的事象について多角的な学びを得られたと同時に、自らの言語学習の振り返りと今後の目標設定のきっかけになったと考えたようである。また、言語の練習相手を超えた友人関係を築いたと感じている学生もいた。

NSが中級クラスに登録することについて、筆者自身は当初懐疑的に感じる部分もあった。しかしアンケート結果にはこの共同クラスがNNSに多大な利益をもたらしたことが示されており、NSの存在意義は想像以上のものであると感じた。この形態を新たなダイナミクスととらえることは十分に可能であり、筆者自身も固定観念から脱却するきっかけとなった。

この形態のクラスを実施するのであれば、重要なのはNSに批判的思考を促すための課題を出し、彼らにとって簡単すぎるクラスにせず、公平性を明確にすることである。そしてそれは、担当教師自身がこの共同クラスの利点をより深く実感する上でも役に立った。

本論で述べた通り、NSには〈やさしい日本語〉と共生社会について批判的に考察し、自分の意見を持つという課題を用意し、これに関連してNNSとは異なる宿題を毎回出していた。両者の異なる宿題は、受講者全員に見える形でシラバスとLMSに毎回記載した。筆者自身は、クラス外での課題やテストについてはNSのレベルに適した十分な量を課しており、NSも洞察に富んだ学びを得たと考えている。(2024年 Princeton Japanese Pedagogy Forum 予稿集に詳述)

一方で、公平性について多少の不満を覚えていた学生がいたことも先述した。特にクラス内での活動に関しては、文法解説を含むレクチャーの時間にNSの集中力が持続しにくかったことを筆者も感じていた。このことから、クラス内でNSに更なる役割とチャレンジを提供する必要性を感じている。今後はNSの発表の回数を増やしたり、会話活動に基づくより詳細なフィードバックをNNSに対して行ってもらうなど、新たな課題を加えることを検討したい。また、NS自身にもクラスに貢献できる方法を考えてもらい、自分たちの役割を積極的に生み出してもらえるような方向付けをしたい。

今回の実践は筆者の勤務校の方針で可能になったものであり、他の機関で行うことは制度的に難しいかもしれない。ただ、類似したケースとして日本語レベルがクラスのレ

ベルより極端に高い学生が受講を希望することは、様々な教育機関で頻繁に起こっているようだ。このようなケースに遭遇した場合、〈やさしい日本語〉の理論の理解と実践という課題を設定して学生を受け入れてみることは価値のあることだと強調したい。

今回は大卒についての予備調査的な発表になったが、今後はNSとNNSのインターアクションがもたらすモチベーションへの影響に焦点を絞るなどして、さらに詳細を探っていきたいと考えている。

引用文献

庵功雄 (2019) 「マインドとしての〈やさしい日本語〉理念の実現に必要なもの」 庵功雄・岩田一成・佐藤琢三・柳田直美 (編) 『〈やさしい日本語〉と多文化共生』 第1章, ココ出版, pp. 1-21.

オストハイダ テーヤ (2019) 『〈やさしい日本語〉から『わかりやすいことば』へ 共通語としての日本語のあり方を模索する』 庵功雄・岩田一成・佐藤琢三・柳田直美 (編) 『〈やさしい日本語〉と多文化共生』 第5章, ココ出版, pp. 83-97.

櫻井陽子 (2024) 「日本語母語話者による中級日本語クラスでの〈やさしい日本語〉の使用実践と意識の変容 -母語話者と非母語話者の共同クラスの実践より-」 『The 30th Princeton Japanese Pedagogy Forum Proceedings』 pp. 1-17

佐藤和之 (2004) 「災害時の言語表現を考える ― やさしい日本語・言語研究者たちの災害研究 ―」 『日本語学』 23(10), pp. 34-45

松崎久美 (2022) 「海外の学生とのオンライン交流が英語学習意欲に与える影響」 『名古屋芸術大学研究紀要第43巻』 pp.113-124.

毛受敏浩 (2019) 「移民受け入れに向かう日本と〈やさしい日本語〉の可能性」 庵功雄・岩田一成・佐藤琢三・柳田直美 (編) 『〈やさしい日本語〉と多文化共生』 第1章, ココ出版, pp. 23-46.

吉開章 (2019) 『入門・やさしい日本語 外国人と日本語で話そう』 アスク出版